

ラグビーフットボールのビデオ分析における音声への注目が選手間コミュニケーションに与える影響

1 6 3 2 1 1 3 徳大寺希璃子

指導教員：山崎治 准教授

1. はじめに

ラグビーフットボール競技では特有のコンタクトプレーが行われるため、ボールの位置や確保の状況をプレーヤー間で共有しなくてはならない。そのため、山中ら（2002）は、ラグビーフットボール競技における「声」は重要になってくると述べている。

試合中のコミュニケーションにおいて「声」をどのように利用しているか、選手自身が意識することは重要なトレーニングになり得るが、試合の中で自身の声に意識をむけることは、プレーを阻害する可能性もある。そこで本研究では、試合のビデオ分析により個々の選手の運動スキル獲得、チームとして戦術・戦略の現状分析や課題発見が行われることに注目した。ビデオ分析を行う際に、音声や環境音に注目した試合分析を行うことで、その後の練習や試合において選手個人に声の重要性について、より意識をもってもらうことが可能になると考えられる。こうすることで、選手間のコミュニケーションの向上を目指し、チームの勝利に繋がることが期待される。

2. 目的

本研究では、ラグビーフットボール競技における、音や選手間の声の有無が試合分析にどのような影響を及ぼすのかを検証し、声に着目させた分析によって試合中のコミュニケーションが改善するか確認することを目的とする。

3. 実験 音の有無によるビデオ分析への影響

3.1 方法

実験参加者：本大学体育会ラグビー部4年生（ラグビー歴4年～10年）6名が個別に実験に参加した。

実験計画：音声および音の有無を要因とした1要因2水準参加者内計画で実施した。試合の動画に音が入っているものを「音あり」条件の刺激とし、無音のものを「音なし」条件の刺激とした。

材料：試合（千葉工大―都留文科大）を録画した動画（11分29秒）を使用した。試合前半開始後0分から9分程度までの5分43秒の動画と、試合後半開始後0分から14分程度までの5分46秒の動画を実験材料として切りだした。

試合前半と後半の2本の動画それぞれに対して、音あり条件および音なし条件の状態での提示とすることで計4パターンの実験材料を使用した。

手続き：はじめに試合分析のポイントを全体的に把握してもらうため無音の試合動画を通して視聴してもらった。その後、音あり条件および音なし条件それぞれの提示の仕方により、試合分析をしてもらった。これらそれぞれの試合分析では、プレーで気になるところを口頭で指摘するよう依頼した。指摘の際には動画を一時停止し、指摘の内容を発話してもらった。音あり条件と音なし条件の実施順を参加者ごとに変えることで、順序効果を相殺した。2つの動画に対する試合分析の終了後、全体の感想や意見、

声や音の有無で試合の分析のしやすさの違いを紙に記述し回答してもらった。

3.2 結果

参加者が指摘した内容をまとめ、集計した。

表1に声に対する指摘内容を一覧にしたものを示す。「前1～3」は先に音あり条件の実験をした参加者、「後1～3」は後で音あり条件の実験をした参加者の結果となっている。表1に、参加者ごとの指摘回数を示す。

表1 声に対する指摘内容

参加者	内容	条件
前1	ラックの近くで「越えられる」の声	有
前3	プレーヤーが抜けたのに対して、周りから呼び声があったのでボールが繋がった	有
後1	アドバンテージ、マイボールの共有（声大きい）	有
後1	マイボールになった時の声が大きく、共有できている	有
後1	マイボールコールができていない	有
後3	S0の声がよく通っている	有
後3	BKの指示の声大きい	有

声に対する指摘は、参加者6名中4名が行っていた。「声」に対する指摘の回数として、音あり条件では7回、音なし条件では見られなかった。次に、図1に全体の指摘内容の分類についての割合を示す。

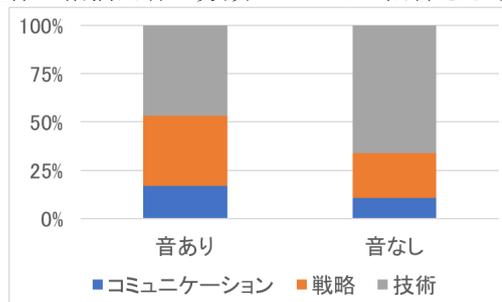


図1 全体の指摘内容の分類割合

図1より「コミュニケーション」および「戦略」に対して音なしよりも音ありの方が増えている結果となった。「コミュニケーション」への指摘は6人中5人見られ、そのうち5人中3人が音なしよりも音ありの方が増えている。

4. まとめ

今回の実験の結果より、試合のビデオ分析での音の有無は、分析結果に影響が出ることが明らかとなった。また、指摘内容の結果より、今後の試合中のコミュニケーションへの影響もあるのではないかと考えられる。

参考文献

山中 一剛・一森 勇人・坂田 好弘・田中 弘之（2002）. ラグビーフットボール競技の状況判断に必要な「声」に関する研究 鳴門教育大学実技教育研究, No.12, 63-69.